彼方【かなた】

校長通信
H24.10.15
Vol.25

【人は人によって人になる】

県中学校長会の研修会で植草学園大学教授、野口芳宏先生の講演がありました。「目先のこと、その先のこと」という演題でしたが、楽しい学びが沢山ありました。心に残ったのは、「人は人によって人になる」と言う話です。最初の人は動物学としての「ヒト」、最後の人は「人間」、そして「人によって」というのは「教育によって」という意味で、「教育」の持つ重要性を改めて意識させて頂きました。

教育は、家庭教育、学校教育、社会教育に分けられますが、それぞれが担っているものがあります。家庭、学校、社会が担うべき役割が果たせているかが問題なのです。家庭は「安らぎ」を、学校は「教育」を、社会は「互助・協力」を子ども達に教え、みんなで育ていかなければならないのです。

しかし今、それがきしみだしているように感じます。青少年研究所が公表したデータでは、「親に反抗する」「先生に反抗する」を「本人の自由」と答えた高校生が中国や韓国では、２割にも満たないのに、日本の高校生は８割を超える生徒が、「反抗するのは本人の勝手だからしかたない」と答えているのです。また、自分の将来に対して「大きな希望を持っている」と答えた中学生は、中国が９１％、韓国が４６％に対し、日本はわずか２９％でした。さらに、「自国への誇り」については、「持っている」と答えたのが、中国９２％、韓国７１％に対して、日本は２４％と大変低かったということです。

家に帰っても夫婦喧嘩や親子喧嘩が絶えず、安らぐどころか戦いの日々になっていたり、食事も満足にできなかったりしている子どもたちが沢山います。家庭が、安らぎの場ではなく、戦いの場になってしまっています。学校でも放っておかれ、わからない授業を静かに受け続ける子どもたちが沢山います。学ぶことが楽しいという本来ある学校ではなく、これも戦いの場になってしまっています。社会に出れば、助け合うことではなく、結果だけを求められ、戦わなければ生きられない、戦えない人は、その輪の中にも入らず、定職にすら就けない現実が…。家庭も学校も社会もゆがみを持ったままになってしまっているのですから、親や先生を尊敬する心が育っていかないのも致し方ないことなのでしょうか。

講演では、さらに「研修」に話が及びました。「研修」とは、「研究」と「修養」の略語です。「研究」は、どの学校も「研究」主任を立てて、一生懸命学んでいます。ところが、「修養」は本人任せです。

「研究」は子どもたちを指導する技術を学び、目標にどのように迫れるかを追及することです。「修養」は、「知識を高め、品性を磨き、自己の人格形成に努めること」とあります。子どもたちをどうするかということについては、先生方は一生懸命学びますが、自分自身を磨くことに関しては、どうでしょうか？

確かに「学び続ける教師でなければいけない」と改めて実感しました。教師の職を退いてもなお人格の形成をしていかなければならないことを肝に銘じて、仕事に励みたいと思いました。

最後は、目的を語れる校長になってほしい旨のお話を頂きました。今まで日々心がけてきたことではありますが、さらに意識していかなければならないと痛感いたしました。

目的は、目標の上位にくるのです。なぜなら「的」はひとつですが、「標」はいくつでも付けられるからです。ところが、目指すべきものがはっきりしないため、一人一人の先生方はそれぞれに一生懸命仕事をするのですが、成果が上がらないという図式になっているというのです。例えるなら、手漕ぎボートに乗り、行く先も見ずに海に漂っているようなものだそうです。一生懸命漕ぐけど行き先が決まっていないので漕ぎ方が雑、向いている方向がバラバラ、でも一人一人の漕ぎ手（先生）は、波に負けないように必死にオールを動かしているということです。

全員が目的を意識し、国民を育成していることに気づけば、必ずや日本の将来は明るくなります！

本校は「自主貢献」（自ら判断・行動し、助け合って生きる生徒になろう！）が目指すところです。そのことが教育基本法の第一条、第二条につながってくると考えています。

「何のために」「何が目的で」を常に子どもたちや自分自身に問いかけてみたいと思いました。

教育基本法第一条（教育の目的） 教育は、**人格の完成を目指し**、平和で民主的な**国家及び社会の形成者として必要な資質**を備えた**心身ともに健康な国民の育成**を期して行わなければならない。

※第二条は（教育の目標）が記されています。